

◎第104回例会は下記の通り行います。会場にご注意ください◎

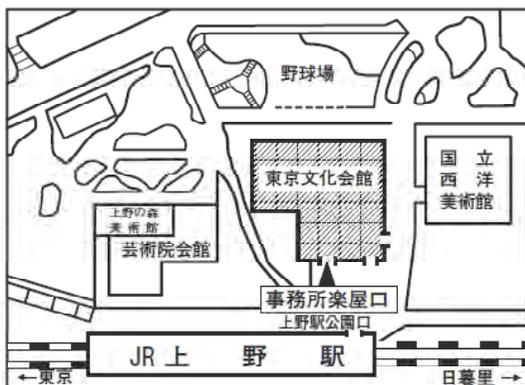
第104回例会のご案内

日時：2006年3月15日（水）18:30～

内容：鈴木 啓介氏（文京区教育委員会）
「文京区での近年の調査事例（仮題）」

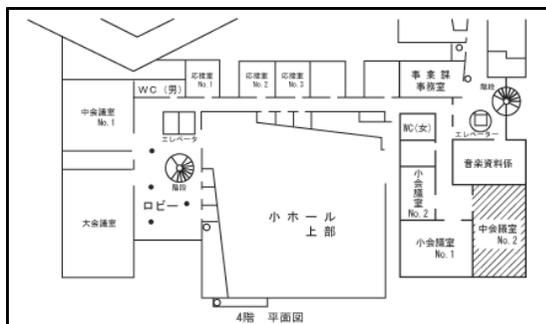
会場：東京文化会館 4F 中会議室2

交通：JR 山手線上野駅 上野公園口改札
徒歩1分
東京メトロ日比谷線、銀座線上野駅
7出口 徒歩5分



問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室
03-5452-5103（寺島・堀内・成瀬）

江戸遺跡研究会公式サイト
<http://www.ao.jpn.org/edo/>



【事務局よりお願い】

年が明け、本会も新年度に入りました。そこで同封しました振り込み用紙にて、本年度分の通信費を入金していただくようお願い申し上げます。なお、先月の大会参加者などすでにお支払いを済ませている方には振込用紙は同封されていません。また、過年度分を滞納されている方で、特に2003年からのお支払いを済まされている方が何人かいらっしゃいます。該当される方は、本会の年会費は会報印刷・通信費の実費であることをご理解いただき、速やかに振り込みをしていただきますよう重ねてお願い申し上げます。

◇江戸遺跡研究会第103回例会は、2005年11月16日(水)午後6時30分より東京文化会館中会議室に◇
◇で行われ、五十嵐彰氏より、以下の内容が報告されました。◇

港区No. 149あるいは赤穂藩池田家・一関藩田村家屋敷跡について

五十嵐 彰

(東京都埋蔵文化財センター 虎ノ門分室)

1. 前口上

まず悩むのは、〈遺跡〉名称である。

調査は、環状2号線新橋・虎ノ門地区の市街地再開発事業に伴い2004年から開始した。開始するにあたって、環状2号線新橋・虎ノ門地区(桜田通り-第一京浜間約1キロ)の事業区域に対して「港区No. 149遺跡」という名称が与えられた。家屋密集地帯を都が買収し、一定面積が確保され次第、街区ごとに調査するという方針である。事務手続き上は、調査区ごとに枝番号を与えて処理している。例えば、今回報告する地点について言えば「港区No. 149遺跡-24、26、25」の3ヶ所の枝番号によって表示されることになる。

但しこれでは、どこに所在するのかすぐには分からないので、「新橋4丁目29番地点、28番地点、4番地点」という地点名称をも併せて用いている。また通称として2004年度分については「新29地点、新28地点」、2005年度以降分については「17-2地点」という呼び方も併用している。

最初の「行政単位ナンバーシステム」はあくまでも行政用語であり、考古学的にはほとんど何の意味もないと考えている。例えば、2005年4～8月に調査した「港区No. 149遺跡-18」(西新橋2丁目24番地点:17-1地点)に隣接して、1985～86年に西新橋二丁目遺跡調査会によって調査された「港区No. 19遺跡」が所在するが、これは調査原因となった同地所在の「西新橋MFビル」の敷地形状に他ならない。もとより「港区No. 149遺跡」の範囲(形状)そのものが新橋と虎ノ門の間を結ぶ幅40mの道路形状であり、1946年に戦災復興院によって都市計画決定された敷地範囲という近現代〈遺跡〉としてならまだしも、近世〈遺跡〉としては何の意味も有さない。

もちろん「新橋4丁目29番地点、28番地点、4番地点」といった現行住居表示も、何回かの地番改正あるいは地割り変更を経た後の、現代の区分に過ぎないのは自明である。

それでは、「港区No. 149」という名称は、何なのか? とりあえず現時点では、考古学的な意味合いは持たせず、あくまでも埋蔵文化財行政を行う上での名称(記号)として、埋蔵文化財包蔵地という法的な表記と考えておく。すなわち「港区No. 149遺跡」ではなく、「港区No. 149包蔵地」として認識する。それは、どのように考えても発掘調査を行うに至った直接の契機である「環状第2号線」という現代の政治・経済的要素と密接に結びついた記号でしか有り得ないからである。

それでは、考古学的な〈遺跡〉名称としては、どのようなものがふさわしいのか。まず考えられるのは、

当地を最もよく表わす居住者に付帯する名称を与えることである。例えば今回取り上げる場所について言えば「一関藩田村家上屋敷跡遺跡」である。こうした事例は、東京都埋蔵文化財センターの調査報告例に限って見ても「尾張藩上屋敷跡遺跡」、「宇和島藩伊達家上屋敷跡遺跡」、「萩藩毛利家屋敷跡遺跡」など複数の事例が存在する。しかしこうした表記が許容されるのも、① 対象とする場所が通年にわたり表記の所有である場合、および②対象とする場所が複数の所有地に区分され得ない場合という二つの条件をクリアする場合に限られる。

例えば、当地の場合には、後述するように近世に限っても備前岡山藩にはじまり陸奥一関藩に終わる複数の所有者を逐一列記しなければならない。あるいは、隣接する「汐留遺跡」の場合にしても龍野藩脇坂家から仙台藩伊達家、会津藩保科家、江川太郎左衛門、安志藩小笠原家にまで至るのである。上記した事例が極めて異例なことは、こうしたことから明らかである。

この難問をクリアする方法として近年増加しているのが、現行住居表示を用いる事例である。例えば、「永田町二丁目遺跡」、「外神田四丁目遺跡」、「新宿六丁目遺跡」などである。しかしこれとて、調査区全体が当該住居表示にたまたま包含される場合はまだしも、「港区No. 149」の場合などは、虎ノ門一丁目から西新橋二丁目を経て新橋四丁目にまで至るし、「新橋四丁目」などという住居区分範囲が近世において何の意味もなさないのは、「ナンバーシステム」の場合と全く同質である。

であるから、今回報告する区域を多少でも考古学的に意味ある表記にしようとするなら「江戸-東京<遺跡>に含まれる新橋四丁目所在の港区No. 149包蔵地」というのはなはだまだるっこしい表現となる。さらに妥協を重ねて、とりあえずは「港区No. 149包蔵地（新橋四丁目所在池田家・田村家屋敷跡）」としておく。なお、これはあくまでも個人的な見解である。

2. 環二地区調査経緯（*今回発表対象地点）

2004年2～4月：149-1<西桜公園地点>（虎ノ門一丁目、石野家・加藤家屋敷跡、270㎡）

2004年5～9月：149-12<虎29地点>（西新橋二丁目、細川家・大嶋家・土岐家屋敷跡、820㎡）

*2004年10～12月：149-24<新29地点>（新橋四丁目、池田家・田村家屋敷跡、204㎡）

*2005年1～3月：149-26<新28地点>（新橋四丁目、池田家・田村家屋敷跡、261㎡）

2005年4～7月：149-18<17-1地点>（西新橋二丁目、堀家・川勝家屋敷跡、310㎡）

*2005年8～12月（予定）：149-25<17-2地点>（新橋四丁目、池田家・田村家屋敷跡、350㎡）

2006年1～3月（予定）：149-27<17-3地点>（新橋四丁目、毛利家屋敷跡、200㎡）

3. 池田家・田村家屋敷跡調査区地歴

池田忠継：輝政次男1599-1615（備前岡山藩38万石）

1615～ 池田政綱：輝政5男1605-1631（播磨赤穂藩3.5万石）無嗣除封

1631～ 池田輝興：輝政6男1611-1647（平福藩2.5万石→赤穂藩3.5万石）

1645年に乱心（妻（筑前福岡藩黒田長政娘）および侍女二人を斬殺）領地没収改易。

- 1645～ 池田光仲：輝政3男忠雄長男1630-1693（因幡鳥取藩32万石）
- 1664～ 池田政直：輝政4男輝澄嗣子 -1665（播磨福本藩1万石）無嗣除封
- 1665～ 池田政武：政直弟分知、交代寄合となり福本藩廢藩
- 1669～ 田村宗良：忠宗3男1637-1678（陸奥岩沼藩3万石）
- *1671：寛文事件（田村宗良蟄居閉門、翌年許される）
- 1681～ 田村建顕：宗良次男（宗永）1656-1708（陸奥一関藩3万石）
- *1701：松の廊下刃傷事件（浅野長矩田村邸にて切腹）

4. 主な出土遺構

- *石組溝（新29地点：新旧、新28地点・17-2地点：間知石・切石）
- *連結土坑状竹樋・木樋（新29地点・28地点）
- *開削式竹樋・木樋（新29地点・28地点・17-2地点）
- *地割溝（新29地点・28地点）
- *地下室（新28地点）落とし釘
- *胞衣皿（新28地点）完形・内容物残存
- *井戸（17-2地点）溜樹
- *大形構造物基礎（17-2地点）1-2号：「X字」状基礎、3-4（5-6？）号：「井桁」状基礎

5. 大形構造物基礎（火の見櫓？）

- *1-2号基礎：柱（一辺30cm、残存長約170cm、中央に向け約13度の傾斜、角を中心に向ける）、基礎（丸太材、端部面取り、現存長4m）、構造（「X字」状）、土留め板柵、1-2号柱間5m余り（3間）
- *3-4号基礎：柱（一辺40cm、残存長約150cm、同じく約13度の傾斜、辺を中心に向ける）、基礎（角材、中央部にて継ぎ手の複合材、約7m）、構造（「井桁」状）、土留め板柵、3-4号柱間約6m

6. 後口上

今回調査対象となった地域は、「芝愛宕下」と呼称されてきた江戸城に接する東海道に玄関口に当たる。北は虎ノ門から築地川に連なる外堀、西は標高26mの愛宕山、南は増上寺の寺域の北限、東は宇田川橋と芝口橋を結ぶ東海道に囲まれた区域である。

イタリア生まれのイギリス人フェリックス・ベアトが、1865年に愛宕山から撮影したパノラマ写真に、芝愛宕下の全域が鮮明に写しだされている。

それから約80年後の第二時大戦中に当該地域には高速道路の新設が想定されて建物の強制疎開がなされていた。敗戦後、この計画を利用して戦災復興院が幅員100mの環状2号線の都市計画を決定した。しかし1949年にはドッジラインの緊縮財政によって、東京の復興計画は全国一の圧縮となり、環状2号線の幅員も半分以下の40mに縮小された。GHQは、敗戦国として戦災復興事業は相応しくないと終始冷

淡な姿勢を示し、環状2号線についてもGHQあるいはマッカーサーが関与したというのは俗説に過ぎないとされている(越澤明2001『東京都市計画物語』ちくま学芸文庫:p.259)。

当該地域については、4階以上のビル建築が規制されたまま約半世紀が経過した後、1989年になって道路整備とビル建設を併せて行う立体道路制度が創設され、1998年に新橋・虎ノ門地区市街地再開発事業が都市計画決定され、2004年2月より埋蔵文化財の調査が開始された。

汐留地区が広域鉄道施設として利用されてきたために地下の埋蔵物が良好に保存されていたのと同様に、本事業区域についても戦後直後からの建築規制によって高層のビル建築がなされることなく、幅40m・長さ1^{km}の区域にわたって地下の埋蔵物が現在に至るまで良好に保存されてきた稀有な区域と言える。

一方で現存する多数の家屋の買収・移転を待って埋蔵文化財の調査を行うという特異な状況下にある本事業の性格上、調査の先行きが不透明であるが、個別の調査事例を積み上げることで、現代の鳥瞰図絵師といわれる立川博章氏の労作「愛宕山山頂から浜御殿を望む鳥瞰復元図」(2002)にみられるような芝愛宕下地区の近世から現代に至る景観を復元していきたい。

文献

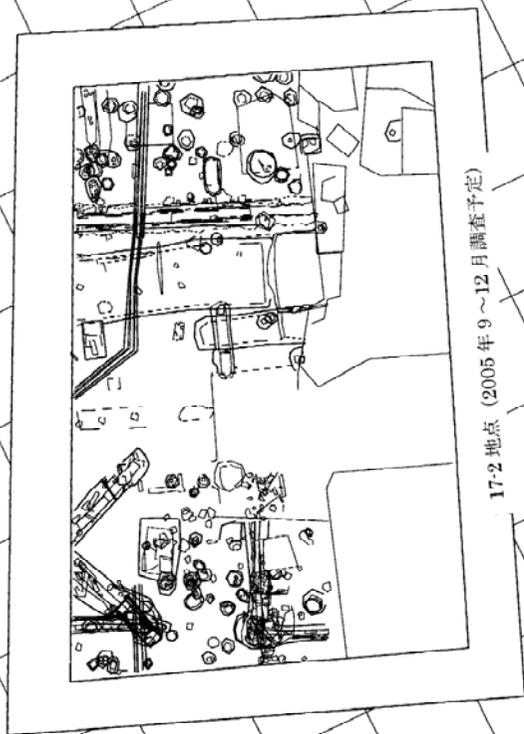
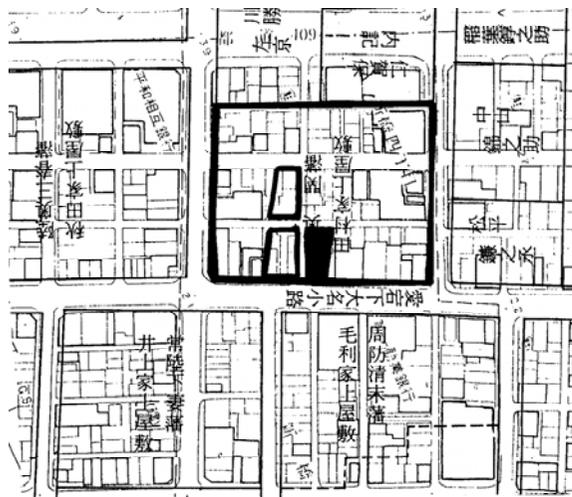
五十嵐 彰2004a「近現代考古学認識論-遺跡概念と他者表象-」『時空をこえた対話-三田の考古学-』慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室:339-347頁

五十嵐 彰2004b「港区No.149遺跡」『平成16年度東京都埋蔵文化財センター発掘調査発表会資料』

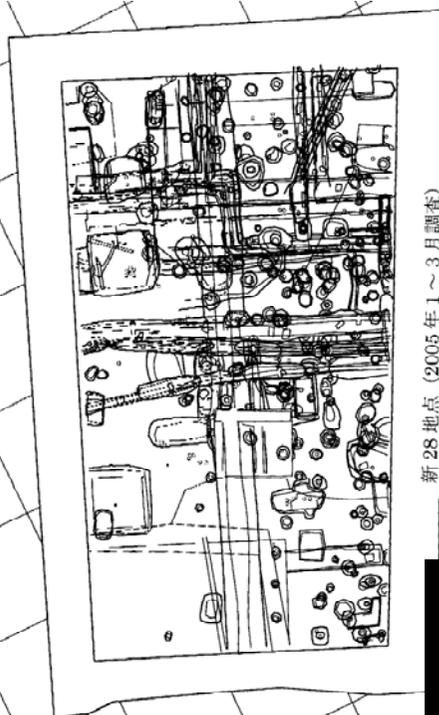
五十嵐 彰2005a「遺跡地図論」『史紋』第3号:99-107頁

五十嵐 彰2005b「港区No.149遺跡」『2005年度第2回東京都埋蔵文化財センター発掘調査発表会』

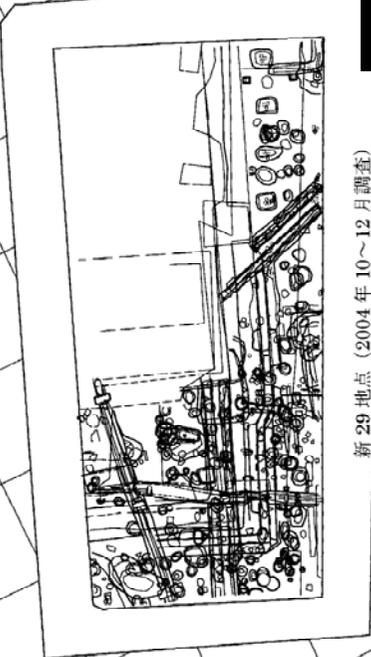




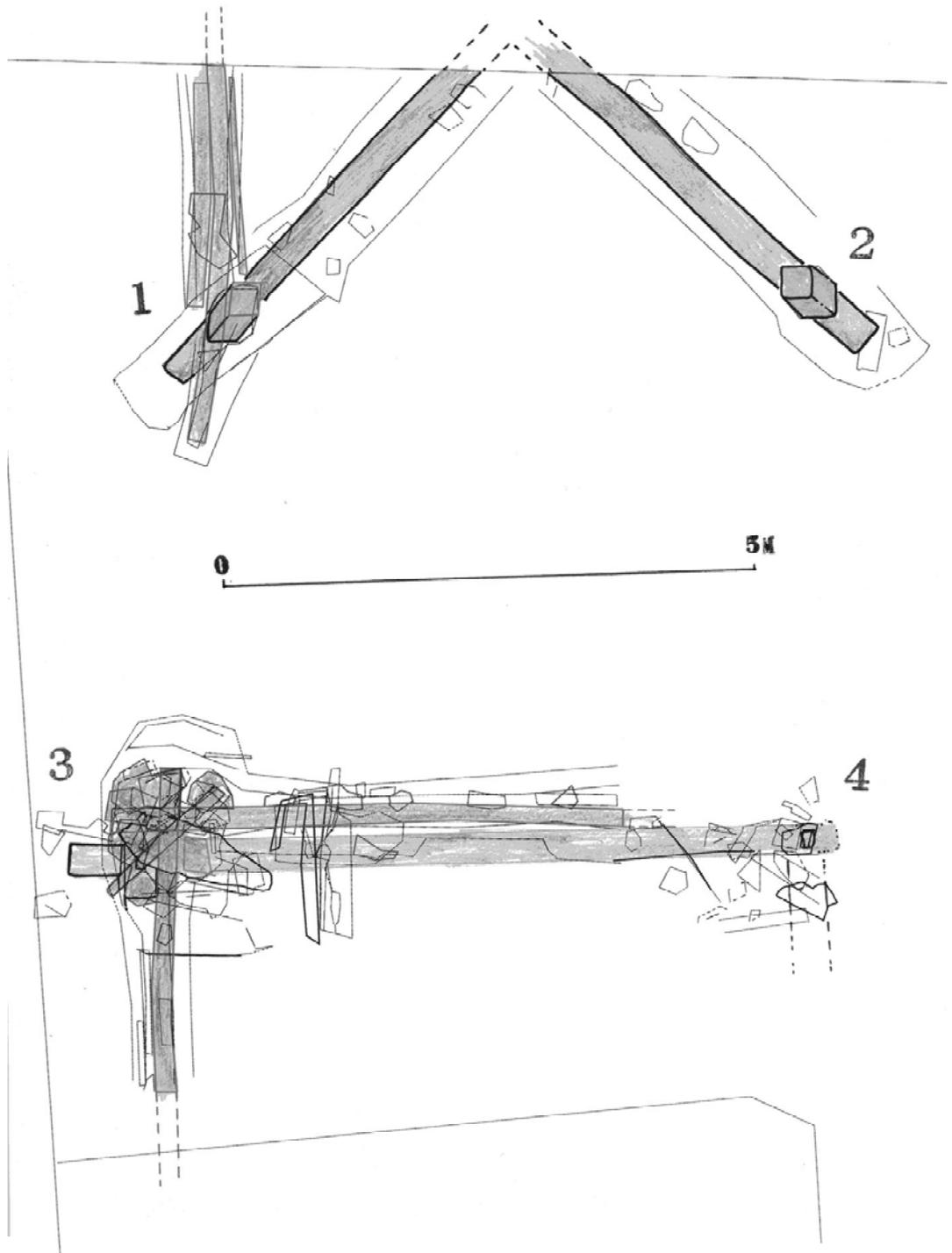
17-2 地点 (2005 年 9 ~ 12 月調査予定)



新 28 地点 (2005 年 1 ~ 3 月調査)



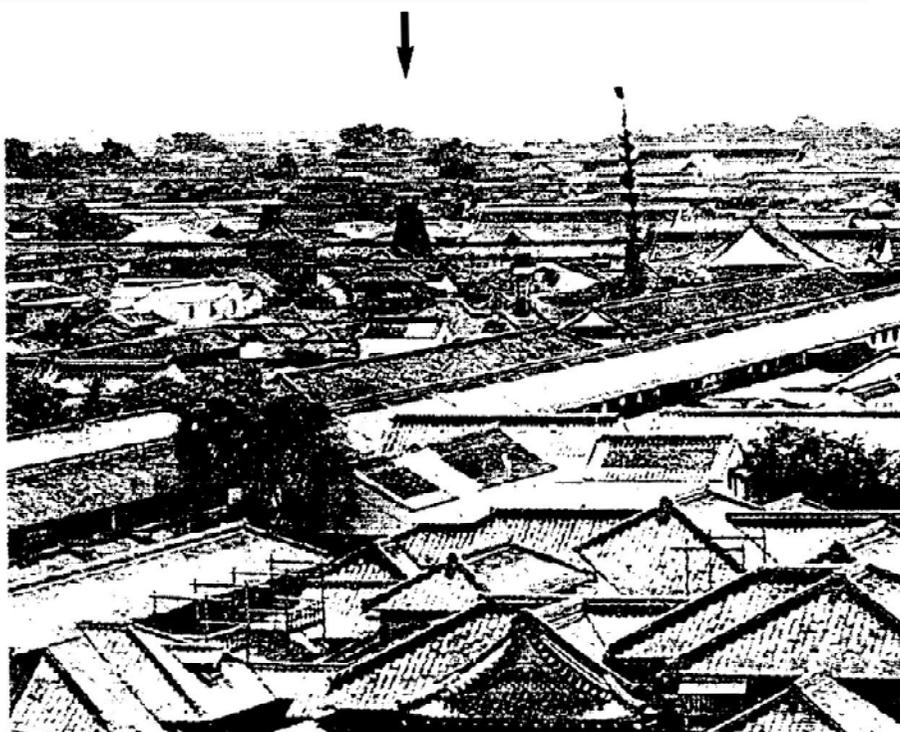
新 29 地点 (2004 年 10 ~ 12 月調査)



第4図 構造物(檣)基礎



第5図 「有馬屋敷の火の見櫓」（『風俗画報』1898年）



第6図 「愛宕山から見た江戸」に見える田村家屋敷と思われる「火の見櫓」
(F. ベアト撮影 1865年)

江戸遺跡研究会第19回大会「江戸の上水・下水」に参加して

毎田 佳奈子

(港区立港郷土資料館)

2006年1月28日（土）・29日（日）の2日間、台東区生涯学習センターで行なわれた江戸遺跡研究会第19回大会に参加しました。衛生的な生活を送るために欠かせないインフラである上下水道には、江戸という都市の遺跡に関わる以上は、多かれ少なかれ関わらざるを得ません。私も港区内の遺跡に携わるようになってから、上下水道関連の遺構を頻繁に目にするようになりました。自分が調査で感じたことと、どこが同じで、どこが違うのかというような漠然とした興味を持って2日間の大会に臨みました。

* * *

今回の大会は考古学のほか、建築史学・文献史学を専門とする方々の発表が行なわれ、各立場からの異なる視点から、上水・下水のさまざまな事例や今後検討していくべき論点などが明らかになりました。

まず、玉川上水以前の上水道についてです。上水道は玉川上水から突如として現れるのか、答えはノーです。波多野純氏は、「玉川上水以前」についての上水について取り上げ、建築学的考察から玉川上水以前からあった上水道を整備し、取り込んでいくことで、玉川上水などの上水道を作っていたことを指摘しています。発掘調査においては、まだまだ事例は少ないもののその時期の遺構が発見されており、後藤宏樹氏が東京駅八重洲北口遺跡で発見された、玉川上水以前の上水である可能性のある、直方体の切石を組んで作られた石組溝を、榎木真氏が地下鉄南北線関連工事に伴う事前調査で発見された大形木樋を紹介しています。

玉川上水以降の上水道については、発掘調査の事例が増えつつあり、今回の大会では千代田区・新宿区・港区・中央区・台東区の遺跡が取り上げられました。斉藤進氏は発表のなかで、港区汐留遺跡で発見された膨大な上水施設の構造の詳細な分類を行ない、構造の違いなどについて言及しています。仲光克顕氏は細かな生活面を捉えることのできた、日本橋一丁目遺跡や日本橋二丁目遺跡を取り上げ、各遺構の消長について、細かな分析を行なっています。

そして、上水道の目的に関する発表もいくつかありました。古泉弘氏が基調報告の中で引用していた、神吉和夫氏による上水の江戸における機能分類は、①生活用水、②防火用水、③泉水用水、④濠用水、⑤下水用水というものでした。発掘調査では、③泉水用水として、後藤氏が千代田区飯田町遺跡の事例を、榎木氏が新宿区内藤町遺跡1次調査の事例を、斉藤氏が港区汐留遺跡の事例を紹介しています。また、斉藤氏は市谷本村町遺跡の事例について、火除け地との位置関係や地形などから、湧水を水源とする②防火用水である可能性を指摘しています。

このほか、上水関連では水源の問題も取り上げられました。湧水を水源としている可能性のある事例として、榎木氏が「馬場下町町屋」や「牛込若宮八幡前旗本屋敷」を、斉藤氏は市谷本村町遺跡を紹介しています。

下水道関連では、仲光氏は町屋における敷地境としての役目を持つ下水石組の事例を取り上げています。そして、小俣悟氏が発表された上野広小路遺跡で検出された石組水路は、約 10 cmもの厚さの板を底板としている、特異でかつ興味深い事例でした。このような考古学的成果を考えていくにあたっては、栗田彰氏の発表で使用されたような、生活風景を描いた錦絵などに、下水道がどのように描かれているのかをもっと積極的に読み説くことも必要と感じました。

このほか、肥留間博氏は「玉川上水留」の内容を主体とする発表でしたが、御普請の基本的な流れを a 準備、b 起案、c 着工、d 施工、e 完了という5つの段階に分けて説明を行なっています。特に、c 着工の、資材輸送保管のために船河岸（揚場）が定められ、そこで木樋などとして加工される木材の下拵えが行なわれ、車で輸送し、現場で組み立てられていたという具体的な手順に、考古学に携わるものとしては興味を覚えました。

* * *

上水・下水という上下の問題というのは、焼物における「上手」「下手」と同様に、ここまですぐで、ここからが下というような、はっきりとした区別が難しいという印象を受けました。後藤氏などが発表のなかで指摘していたように、江戸時代の下水は、主に雨水であり、今のように汚くなかったことも、上下の区別を難しくしているのかもしれませんが。また、上水道には排出口があることから、どこまですぐで上水で、どこからが下水、あるいは何を上水、何を下水とするかという判断基準がはっきりとしていないことも「上」「下」があいまいな理由の一つでしょう。

今回の大会を振り返っていくなかで、上水道・下水道というものを「取水ライン」と「排水ライン」というような、一つのラインとして捉えていくのが良いような気がしてきました。

取水ライン（上水道）はどこかで排水ライン（下水道）に合流することがあると思われませんが、排水ラインは、他の排水ラインとつながることがあっても、そこから再度取水ラインに流入することはなかったのではないのでしょうか。また、取水ライン（上水道）が排水ライン（下水道）と接続していない時、上水道に水を排出するはけ口があったとしても、そこから流れ出る水は上水と認識されるのが良いと思われます。そして、斉藤氏の発表にあった市谷本村町遺跡の事例のように、取水ライン（上水道）が枡などで行き止まり、取水口を通して水を外に排出するような場合は、取水ラインは必ずしも排水ラインにつながってなくても良いのかもしれませんが。このように上・下水道をそれぞれ一つのラインとすると、栗田氏が紹介していた屋根の上の天水桶は、雨水を利用するための取水ラインと捉えられるでしょう。

上・下水道に関わる今後の問題点としては、討論の際に指摘のあったとおり、掘り抜き井戸と上水道との関係性が挙げられます。また、榎木氏は新宿区の調査に携わる立場から、良水の得やすい四谷から牛込の地域での上水道の役割について考えていく必要があるとも述べています。上水の質の低下から掘り抜き井戸への移行が進んだという論も含めて、今後議論していく必要があると思

いました。

このほか、用語の使い方の問題が取り上げられました。樋は「ひ」なのか「とひ」なのかという点については、考古学では慣例的に「ひ」という言葉を使っています。このような用語の問題は、2004年に行なわれた江戸遺跡研究会第17回大会「続 遺跡からみた江戸のゴミ」の際に、小沢詠美子氏が指摘した「ちかむろ」「ちかしつ」の問題にも通ずるものです。名称は考古学的な造語に陥ることなく、文献等の記載などを参考に、江戸時代に使われていた名称を常に意識して使用する必要があると思いました。

発掘調査によるあらたな事例の積み重ねが待たれるとともに、現在までに蓄積された上・下水道の発掘事例から江戸の上・下水道をさらに読み解いていくには、波多野氏の指摘したような、江戸という都市が「近郊農村など広い地域を巻き込んで始めて市民生活が営める」という広域的な視点を持つことが今後必要なのでしょう。

附篇 《港区内の上水・下水》

それでは最後に、港区内で発見された(港区調査分)上・下水施設を紹介したいと思います。

港区内で調査された江戸時代の遺跡では、上水・下水に関連する遺構が多数見つかっています。このうち、報告書が刊行された遺跡について、上水と下水の有無、遺構の簡単な種別についてまとめたのが次の表です。表のなかで、上水としたのは、上水道として認識できた木樋や竹樋、それにつながる枡や桶・井戸で、掘り抜き井戸も上水に加えました。下水は、木組の溝で、屋敷境の役目も持つ石組溝も下水に加えました。表のうち、5遺跡については説明を加えています。

① 近江山上藩稲垣家屋敷跡遺跡

本遺跡は、地下鉄南北線六本木一丁目駅のすぐ東側に位置しています。地形的には、周囲では最も高い場所にあたり、そこから東側にかけて大きく傾斜していきます。発掘調査では、青山上水に関連すると思われる、木樋を埋設した跡が発見されました。掘り形は、半暗渠・半開渠で、木樋が埋設した状態で検出されています。

② 播磨赤穂藩森家屋敷跡遺跡

本遺跡は、JR 浜松町から北側に約 400 m のところにあり、近接の遺跡には汐留遺跡があります。発見された上水施設は木樋・竹樋・枡・井戸などで、ほぼ同じ場所に少なくとも3度の付け替えが行なわれたことが分かっています。また、その付け替えの際に流水方向の変化が起こっており、その要因として廃絶年代などから青山上水廃止にともなう玉川上水への取水変更である可能性を指摘しています。

③ 筑前福岡藩黒田家屋敷跡第2遺跡

JR 新橋駅から西側へ約 1.8 km のところにある遺跡で、黒田家の屋敷の北側部分にあたります。発掘調査では、おそらく隣地との境の役目を果たす、間知石の石組溝が確認されています。この溝は、底に長方形の石が敷かれています。そして、調査区内では掘り抜き井戸が発見されています。

④ 芝神谷町町屋跡遺跡

本遺跡は、地下鉄日比谷線神谷町駅のすぐそばに位置しています。下水木樋と考えられる、天井板を有しない板組の溝が2条発見されました。

⑤ 麻布市兵衛町地区武家屋敷跡遺跡

本遺跡は、芝神谷町町屋跡遺跡と程近い、地下鉄日比谷線神谷町駅の北西、約 350 mのところに位置しています。発掘調査では、青山上水に関すると思われる、木樋や竹樋の痕跡を残す溝が確認されました。

港区内検出 上下水施設一覧表(港区調査分)

	遺跡名	上水	下水	遺構種別	報告書名
武家地	郵政省飯倉分館構内遺跡		○	下水溝?	『郵政省飯倉分館構内遺跡』1986
	旧芝離宮庭園遺跡	○		木樋	『旧芝離宮庭園』1988
	白金館址遺跡	○		掘り抜き井戸	『白金館址遺跡 I』1988
	港区No.19遺跡	○		井戸・竹樋・木樋	『西新橋二丁目 港区No.19遺跡』1989
	港区No.91遺跡	○		掘り抜き井戸	『南麻布一丁目 港区No.91遺跡』1991
	伊勢菰野藩土方家屋敷跡遺跡	○		井戸・木樋・竹樋	『伊勢菰野藩土方家屋敷跡遺跡発掘調査概報』1992
	麻布市兵衛町地区武家屋敷跡遺跡	○		井戸・竹樋・木樋・掘り抜き井戸	『麻布市兵衛町地区の武家屋敷跡遺跡』1993
	西久保城山地区武家屋敷跡遺跡	○		掘り抜き井戸・竹樋?	『西久保城山地区の武家屋敷跡遺跡』1994
	筑前福岡藩黒田家屋敷跡遺跡		○	木組溝	『筑前福岡藩黒田家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』1994
	筑前福岡藩黒田家屋敷跡第2遺跡	○	○	掘り抜き井戸・石組溝	『筑前福岡藩黒田家屋敷跡第2遺跡発掘調査報告書』2005
	長門府中藩毛利家屋敷跡遺跡	○		掘り抜き井戸?	『長門府中藩毛利家屋敷跡遺跡発掘調査報告書 I』2002
	薩摩鹿児島藩島津家屋敷跡第1遺跡	○		掘り抜き井戸?	『薩摩鹿児島藩島津家屋敷跡第1遺跡発掘調査報告書』2002
	麻布仲ノ町地区武家屋敷跡遺跡	○		井戸・木樋	『麻布仲ノ町地区武家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』2003
	近江山上藩稲垣家屋敷跡遺跡	○		掘り抜き井戸・木樋	『近江山上藩稲垣家屋敷跡遺跡発掘調査報告書 I』2004
播磨赤穂藩森家屋敷跡遺跡	○		井戸・木樋・竹樋・枅	『播磨赤穂藩森家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』2005	
寺社地	増上寺寺院群	○		井戸・竹樋	『増上寺寺院群光学院・貞松院跡・源興院跡』1988
	天徳寺寺域第3遺跡	○		掘り抜き井戸	『天徳寺寺域第3遺跡発掘調査報告書』1992
町屋	芝神谷町町屋跡遺跡		○	下水木樋	『芝神谷町町屋跡遺跡』1988
	麻布竜土坂口町町屋跡遺跡	○		掘り抜き井戸?	『麻布竜土坂口町町屋跡遺跡発掘調査報告書』1995
	芝田町四丁目町屋跡遺跡	○		掘り抜き井戸?	『芝田町四丁目町屋跡遺跡発掘調査報告書』1996
	三田台町・三田台裏町・芝伊皿子台町町屋跡遺跡	○		掘り抜き井戸?	『三田台町・三田台裏町・芝伊皿子町町屋跡遺跡発掘調査報告書』1997
	承教寺跡・承教寺門前町屋跡遺跡	○		掘り抜き井戸	『承教寺跡・承教寺門前町屋跡遺跡発掘調査報告書』2004

「江戸の上水・下水」が語るもの

岡村 弘子

(名古屋市博物館)

今大会のテーマは、「上水」だけでも「下水」だけでもなく、両者を敢えてあわせて解明することで、江戸の水系ネットワークを明らかにするというねらいがよく伝わるものだった。筆者も、城下町名古屋における「水のみち」をつかみたいと思い、企画を行ったことがある。当時の重要なライフラインであったこれらの機能・体系は、都市整備のレベルを示すものでもあるし、また利用や運用の実態を解明することは、当時の生活の実態を明らかにすることにもつながる。そしてインフラ整備者と利用者の考え方が、必ずしも一致しているとは限らない。整備者の意図や想定を越えた利用の実態があったはずであり、そのずれが示すものは何なのか…？

以上は筆者の個人的な問題意識であったのだが、実際当日の報告では、特に浮き彫りになった問題がいくつかある。「玉川上水」以前の水系ネットワークの存在、上水・下水の分別定義とそれぞれの末端部分の実態、武家屋敷地における敷設の意図などである。

その中でも、特に興味深かったのが、後藤氏や榎木氏によって報告された、17世紀前半の上水遺構をどのように考えるかという、いわゆる「玉川上水以前」の問題である。これら各地域や藩邸といった、ある程度限定された圏内で構築されていた初期上水遺構は、どのような実態をもち、どのように「玉川上水」へと継承されていくのだろうか。討論の中では、①初期上水遺構が「玉川上水」のネットワークに組み込まれていく、②既存の上水遺構とは別に「玉川上水」のネットワークが構築される、という2つの想定が浮かんできた。実態は、どちらかに限定できるものではないだろう。ただ、幕府の上水整備の当初目的や意図の解明は重要である。今後は、このような視点から遺構の構造や時期から技術的な変遷を確認することが必要になるだろう。

名古屋城下にも、寛文3年(1663)、城下西部の一带に上水道が敷設される。その遺構は幅下小学校遺跡、貞養院遺跡(いずれも名古屋市西区)にて検出されている。いずれも、幹線となる大樋から各家に引き込まれた末端部分であり、古い遺構では17世紀末の竹樋が検出されるが、以後新しい部分では木樋に移行している様子が見えてくる。また、竹樋の継ぎ手や枘、汲み上げ用と思われる桶枠も発見されている。これら上水施設の利用実態については、水道敷設地域であった納屋町の商家「師崎屋」の記録から詳細を知ることができる。それによると、享保年間より上水を利用する家は「水銀」を徴収された上、新規の敷設はもちろん、修理や管理に必要な費用も自己負担であったことが分かる。さらに、「水井戸」と呼ばれた汲み上げ井戸の構造や、それらが約20年で腐朽したための取替え工事の際に、設置位置から樋の材質、寸法まで図入りで記されている。さらに作

業に要した日数、職人まで残されており、これらからは上水利用者の実態を垣間見ることが可能である。

また、近年「享保十四年名護屋城下之図」（愛知県図書館蔵）には、上水の幹線と城下の排水路が記され、その排水路は全て「武家さらへ」「町方さらへ」「自分さらへ」と色分けされて示されていることが分かった。絵図内には浚い分担の変更を示す付箋も付けられており、城下の上下水をあわせて管理するための絵図であったことが推測されている。今後の課題として、このような藩や幕府が残す管理側の史料と、発掘調査での成果や上記の師崎屋の記録など、利用者側の実態を示す情報とをあわせて精査していくことが必要になってくると思われる。実際に検出される遺構が、設置者の幕府や藩に残る史料の情報と必ずしも一致するものではないだろう。

その他、上下水道敷設の技術は、当時の土木技術の粋と思われる。こうした技術が、江戸だけでなく、名古屋をはじめとした地方の城下町に伝えられ、実際に施設完成に導く根幹にあったことは疑いない。上水・下水に関わる普請の技術者はどこを発祥とし、どのように全国に広がっていったのだろうか。それを解く重要な鍵は、やはり江戸の上下水にあると考えている。そして都市における上下水道のもつ意味を捉えなおす試みが必要になるだろう。「江戸」をかたちづくる骨格が、上水・下水をとおして見えてくるような、展望もあるが浮かび上がる課題も大きいと感じた。

江戸遺跡研究会刊行物 大幅値下げ断行！

江戸遺跡研究会では、最近5年以前の大会発表要旨を大幅値下げをしました。

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 第2回 『江戸の住空間とその周辺』 | 第3回 『江戸の陶磁器』 |
| 第6回 『遺跡にみる幕末から明治』 | 第7回 『江戸時代の生産遺跡』 |
| 第8回 『災害と江戸時代』 | 第10回 『江戸の都市空間』 |
| 第11回 『江戸と周辺地域』 | 第12回 『江戸の物流』 |
| 第13回 『江戸と国元』 | 第14回 『食器にみる江戸の食生活』 |

をいずれも **1部 500円** にて頒布しています（1, 4, 5, 9回大会は売り切れ）。

購入希望の方は、六一書房まで、お問い合わせください。

お問い合わせ先 info@book61.co.jp

電話 03-5281-6161 FAX 03-5281-6160

なお、第15回大会以降の発表要旨につきましては、これまで通り原価販売しております。